

まちづくりのヒントをここから!
地域活動事例集



2009

仙台市



この冊子は、環境にやさしい「水なし印刷」「再生紙」を使用しています。

特別企画 **02**

**「これから」の地域づくりを一緒に考える
地域活動座談会**

事例集 **07**

- 事例01 「八幡社の館」～八幡社の館運営委員会～ 08
- 事例02 「吉成地区地域懇談会」～吉成地区～ 10
- 事例03 「青年部による地域課題解決」～八木山南地区～ 12
- 事例04 「子ども安全パトロール活動」～南小泉CSN(チャイルド・セーフティ・ネットワークス)～ 14
- 事例05 「栗っこネットワーク」～栗生地区～ 16
- 事例06 「まちなか農園藤坂」～花壇大手町町内会～ 18
- 事例07 「先進的な地域防災体制づくり」～福住町町内会～ 20
- 事例08 「六七美化一揆連絡会」～六郷・七郷地区～ 22
- 事例09 「ふれあい交流花壇」～土手内若葉町内会～ 24
- 事例10 「広報なかだ」～広報なかだ編集委員会～ 26
- 事例11 「フライハイおいで」「コミュニティまつり」～生出地区～ 28
- 事例12 「マンションの自治会活動」～ライオンズタワー仙台広瀬自治会～ 30
- 事例13 「パソコン教室」「介護予防教室」～燕沢コミュニティ・センター～ 32
- 事例14 「地域住民主体の話し合い」～泉ビレジ館地区～ 34
- 事例15 「将監沼の自然とふれあいを育む会」～将監地区～ 36

必見! 地域活動ヒント集 **38**

「これから」の 地域づくりを一緒に考える 地域活動座談会

いろいろユニークな取り組みをされている町内会・団体の方にお集まりいただき、日頃活動されている中での問題点などをお話しいただくとともに、それに対する解決策や地域活動の展望などを語っていただきました。

若い人たちを巻き込む。 これからのために一番大切なこと。

司会:いろいろと先進的な地域活動や取り組みをされている方々にお越しいただいております。本日は、その活動の中で、苦労した点や問題点などをお話しいただき、他に活動されている方々の参考にさせていただければと思っております。まずは、阿部さんより、お話しください。

阿部:町内会の活動において一番問題だと考えているのは、若い世代を取り込めていないということです。もちろんこの町内会でも町内会長を始めとする役員が頑張っておられるわけですが、後輩たちが養成されていないということが大きいと思っています。この問題を解決するために、八木山南連合町内会では地域課題解決の実行部隊とし

て青年部を作らせてもらいました。10年近く部長としてやらせていただき、私も60代ですが、今も情熱を持ってやっています。

高橋:今、皆さん昔よりずっと若いですから、60代の青年部というのは魅力的で、斬新ですね。

阿部:地域の課題を考えていくために、いろいろと積極的に提言しています。今では連合町内会からも青年部は信頼されていると思います。

高橋:若い方に参加していただくのは、本当に難しいですね。将監は18の町内会・自治会があり、特に県営住宅には比較的若い子育て世代が多いのですが、この地に永住するという意識は少ないですから、自治会への参加も積極的ではありません。高齢化が進んでいる町内会も工夫していかないと運営自体が難しい状況にあります。「育む会」では、子育て



八木山南連合町内会
青年部長

阿部 利美氏

連合町内会内に青年部を結成。災害対策など地域課題を解決する実行部隊として地域に大きなうねりを作っています。

吉成学区連合町内会会長

伊藤 喜郎氏

市民センターの交流会で集まった地域の40団体をもとに、子育て、福祉、防災のネットワークを構築しています。

花壇大手町町内会会長

今野 均氏

様々な団体との連携により、「まちなか農園」を整備・運営。畑のパワーを活用して新しい地域活性に取り組んでいます。

「将監沼の自然」と
ふれあいを育む会事務局長

高橋 節子氏

町のシンボルである将監沼を整備する町内会と住民による組織を設立。地域の交流の拠点として活用しています。

て支援の一貫として、夏休みなどの休日を利用して子供たちが自然の中で遊べるように「プレイパーク」を開催しているのですが、親子で参加されるのはとても少なく、児童館としての利用が主になっていますね。公園の下刈り、清掃活動も私たちの感覚ですと暑くならない朝8時頃からと思うのですが、休日、若い方はまだ寝ている時間のようです。活動時間を含め発想の転換もしなければならないと思います。できあがった仕組みの中に入ってくるのも若い方は抵抗感があるようです。役員の意識を変革して、入りやすい雰囲気を作っていかなければならないでしょうね。次の世代への流れを作っていかなければならないと思っています。

伊藤:うちの町内会でも朝が早いとだめで、夜の会議が多くなりました。生

活スタイルがまちまちなので、集まる時間の設定も難しいですね。若い方たちは趣味趣向が多様化しているので、それに対応していかないといけないんでしょうね。

今野:町内会という枠組みを外そうということにしています。外から人を連れてきています。外には一生懸命やろうとしているNPOやボランティアの方もたくさんいます。そういう方に実践の場を提供すると来てやってくれます。問題を投げかけると自分たちで考え工夫してやってくれます。よそ者だからと言って排除しないことです。外のつながりを大切にしています。

また子ども会と連携することも大切です。子どもをどう喜ばせるかということを考えれば、子育て世代のお母さんも来てくれます。

活動を円滑にすすめるために、組織をどうまとめたらいいか。

司会: 地域活動にとって、組織の運営が大切なことになると思うのですが、皆さんは組織をうまくまとめるために何が必要であると考えますか。

伊藤: 組織をしっかり機能的に分けて、部門別に責任者を付けることが必要です。会長だけが全責任を持つというのでは組織は成りたちません。部門別・職種別の責任者を作ってフォローしあっていくということが大切です。

そして問題意識をしっかり共有することが大切です。そこから足並みのそろった地域活動は始まります。どこの地域も問題を抱えています。それを掘り起こすか、取り組むか、あるいは伏せておくか、の違いです。地域の中に問題を強く提起してくれる人間がいないとだめでしょうね。

町内の中でも問題の提起の仕方によって、町内会だけのつながりから、趣味の会や体育の会など地域の各種団体などのつながりも必要になります。違った意味での交流もできてくると思います。

阿部: 組織を円滑に運営していくためにも、地域の人材を育成しておかなければなりません。5年後、10年後を見据えて先手を打っておかなければいけません。視野を広く持てるかどうかですね。

今野: うまく町内会をまとめるためにも、会長には賛同者が必要です。自分が会長になる時、役員を8人増やし



副会長にしました。私より年上の方も何人かいますが、綿密な意志の疏通ができています。副会長が自主活動を提案して、三役会で調整します。そこで了解が取れば、副会長の責任のもと自由にやっていいということにしています。

高橋: 副会長さんが8人もいらして自主性を持って組織が回っているのなら素晴らしいですね。

阿部: 私は、個人的意見として会長職は、3期の6年ぐらいがいいと思います。6年が来たら、交代できるように次の人材を育成しておくべきです。よく会長さんが「替わってくれる方がいなくて大変だ」と言いますが、町内会に住民がどんどん入ってきてくれる地域づくりが必要です。すべてを抱え込むと自分だけ苦しいことになります。三役に負担のかからない仕組みづくりが必要です。

司会: 町内会長におんぶにだっこではない、みんなでやろうという雰囲気づくりも必要になるのかも知れません。

地域の人材をどう見つけ出し、どう参加してもらうか。

司会: 地域にはいろんな素晴らしい人材がいらっしゃると思います。その人材にどのように出会い、どのように参加してもらうか、というのも地域活動を活性化し、より有効なものにしていくために必要なことだと思いますが、どのような形で地域の人材を引き出されていますか。

伊藤: 地域の人材の掘り起こしは難しい問題です。うちの場合は、市民センターで交流会を開催し各種団体に来てもらうという方法を採用しました。まずは、『顔見せ』から始まらないとだめです。最初から『お願いします』のような頼み方は、先方にも重荷を持たせません。きっかけづくりが大切です。楽しくこの土地で住みたいという目的は同じですから。同じ仲間として、積極性を身に付けていくことが必要です。

高橋: 地域に大学の先生がいらっしゃいますが、気軽に活動に参加していただいており、お一人は物腰がとても柔らかで総会の議長やご自分の体験をもとに研修会を開いていただいています。歴史研究の先生には、「ふるさと探訪」の講師などの取り組みをしていただいております。地域の方の力をお借りするということが大切ですね。

阿部: 地域の人材を見つけて出すためにも、住民の名前と顔を覚えることが大事です。顔見知りになれば、地域活動に参加してください、ということも言いやすくなります。

高橋: 定年退職された方で、それまでは奥さんまかせにしていた地域のことを積極的にやろうという方が増えてきています。そういった方が輪番制の役員の任期が終わっても何かの役員として引き続き町内会に留まるようにすることが必要なんだと思います。

地域にも温度差がある。だからこそしっかりPRして理解してもらう。

司会: 次世代の担い手を作っていくためにも地域にしっかりPRしていくことが大切だと思うのですが、そのあたり地域へのPRをどのようにされていますか。

今野: パンフレットやチラシなどが必要なんだと思います。カラー印刷なども活用しないとだめですね。若い方に頼むことも必要。うちは広報部を作ってPR活動をしています。全戸に配布は難しいので、回覧したり、掲示板に張ったりしています。

阿部: チラシの表現方法というのがすごく大事。ポイントをつかんで『青年部は〇〇の検討に入りました!』というようにプロジェクトの途中段階をどんどん表に出していきます。大切



なポイントはカラーにして、若い方々にデザインをまかせるべきですね。町民が無関心だということであきらめるのではなく、情報で引きつけていくという発想が大切です。実績ができて、感謝されると、若い方々もますます頑張ります。

今野:しっかり問題に対応してあげないと地域住民もだんだん問題として提起しなくなります。逆に問題を解決してあげると、じゃあこれもお願いしますということになります。住民には問題があればいつでも私に言ってくださいと言っています。ハチが出て困るということでも、しっかり対応することが大切です。

ふるさとと言える場所が好きだから、もっと地域を良くしたい。

司会:町内会の活動は、ここまでやらなくちゃならない、というラインがあるわけではありませんよね。そういった中で皆さんが精力的に地域活動をされている、その突き動かすものというのは何ですか。

今野:地元愛ですかね。例えば、自分たちの取り組みに対して子どもたちが『ありがとうございました』と書いてくれる。そういうメッセージをもらうと、よし次も頑張ろうという気になります。

伊藤:私の場合は誇れる街にしたいということでしょうか。子どもたちがもっと誇れる街にしたい。別に高尚なテーマがあるわけではなく、楽しい、安堵できる街にしたいですね。

阿部:もちろん70代80代も大切ですが、

経験が豊富になってくると、これをやったら大変だと言うことがわかってきます。ですから、地域を突き動かすのは40代50代です。苦しくたって乗り越えていく年代層として、地域のために頑張っていきたいと思います。

高橋:私の場合、40代の頃は自分の事で精一杯で、正直地域のために何かをしようとは考えていなかったですね。活動に携わっていくにつれて、地域のことを先輩達が永年やってくださって今があるということに気づいてきました。何かに携わって恩返ししていきたいと思うようになりました。『将監沼がきれいになったね』との地域の方々の声や子どもたちの感謝の感想文を頂いたりすると、頑張ってくださいている皆さんの励みになりますし、やりがいも感じますね。

司会:少子高齢化が進んでいて町内会も運営が難しい時代になっています。しかし、そういう時代だからこそ次の世代に輪を広げながら、日頃の活動を続けていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございます。



事例集

- 01 「八幡社の館」
～八幡社の館運営委員会～
- 02 「吉成地区地域懇談会」
～吉成地区～
- 03 「青年部による地域課題解決」
～八木山南地区～
- 04 「子ども安全パトロール活動」
～南小泉CSN(チャイルド・セーフティ・ネットワークス)～
- 05 「栗っこネットワーク」
～栗生地区～
- 06 「まちなか農園藤坂」
～花壇大手町町内会～
- 07 「先進的な地域防災体制づくり」
～福住町町内会～
- 08 「六七美化一揆連絡会」
～六郷・七郷地区～
- 09 「ふれあい交流花壇」
～土手内若葉町町内会～
- 10 「広報なかだ」
～広報なかだ編集委員会～
- 11 「フライハイおいで」「コミュニティまつり」
～生出地区～
- 12 「マンションの自治会活動」
～ライオンズタワー仙台広瀬自治会～
- 13 「パソコン教室」「介護予防教室」
～燕沢コミュニティ・センター～
- 14 「地域住民主体の話し合い」
～泉ビレジ館地区～
- 15 「将監沼の自然とふれあいを育む会」
～将監地区～

受け継いだ町の宝を 地域活動の拠点に。

「八幡杜の館」

～八幡杜の館運営委員会～ 事例 01

天賞酒造の酒蔵を八幡杜の館に 地域が主体的に管理・運営

町のシンボルを後世に残したい。
地域からあがった熱い想いが結実。

「市の都市景観賞も受賞した八幡町の街並みの象徴的な存在でしたからね。町の皆さんからも残したいという声がたくさんあがりまして」と語る八幡杜の館運営委員会委員長の細谷さん。

天賞酒造が川崎町に移転する際、地域から「何とか残したい」という声があがり、八幡地区まちづくり協議会与区役所が協議。その結果、市が土地を購入し建物を移築、以前天賞酒造の庭だった場所を公園として一体的に整備し一緒に管理することになりました。公園は池を中心に風情ある憩いの場を住民に提供しています。「八幡の



宝が残されたようでうれしかったですね。館内には天賞酒造を紹介したパネルや古地図などを展示して、今につながる町の歴史を伝えています。」

入場は無料。多くの人が訪れる地域の観光スポットになっています。

運営委員と協力委員の協力体制。
無理のない形を模索しながらの運営。

八幡杜の館は運営委員と協力委員で運営されています。

「八幡杜の館」の運営に当たり、八幡地区まちづくり協議会を母体とした運営委員会を設立。13人の運営委員が館内で行う展示会やイベントの企画立案などを行っています。

日直を行うボランティアの協力委員は10名。運営委員の知り合いの方に声がけしたり、近隣の町内会からの推薦をお願いしています。

「協力委員は主婦の方が多いため負担にならないような形でお願いしています。担当時間も、家事のことを考えて10時から16時までとしたり、午前・午後に分けたり工夫をしています。」

地域の宝を活用する工夫 学校との連携や サポーター制の導入

地域の学校とも連携。
若い世代が地域を知るきっかけに。

八幡杜の館を巡る地域の輪は若い世代にも広がっています。女子高生が地域の歴史の授業の一環として見学に来たり、小学生が広瀬川の研究など総合学習の授業として訪れるという機会も増えています。「八幡って昔はこうだったんだ、と目を丸くして感動してくれます。」

今秋には小学校と連携して絵画コンクールを開催。テーマは「八幡町のいいところ」。「子どもたちに町のいいところを発見してもらうことは、今後のまちづくりにとっても大切なことだと思います。」

このような子どもを通したまちづくりは、保護者にも地域との接点が生まれるという意味でもとても意義のあることです。「八幡杜の館」では、今後も継続して開催していく予定です。

今後はサポーター制度も導入予定。
幅広いつながりでさまざまな企画を。

多彩な展示会やイベントを開催している「八幡杜の館」。最近では個人からも「展示用に使いたい」という問い合わせが増えてきています。落語会なども開催しており、地域文化活動の拠点としても利用されています。

また、古民家に興味のある若い女性が訪れることもあるそうです。「町の外からも人が来てくれるのはうれしいことですね。」



活動が広がってきたことから、今後、会を企画部と広報部と管理部に分けて、ホームページを立ち上げるなど、活動を充実させていこうとします。また、今後館内の企画をより充実させていくために、地域内外の方に呼びかけを行い、年間一口1,000円でサポーターとなっていただく制度を計画しています。

サポーター制度を作ることで、資金面だけではなく、展示の企画アイデアを出してもらうという二重のメリットが生まれます。「多彩な企画を行うためにもサポーターを増やしていきたいですね。」

こんな工夫もしています!

町を元気にする 八幡地区まちづくり協議会

八幡杜の館運営委員会の母体となった八幡地区まちづくり協議会は、地域のいろいろな団体から構成されています。さまざまな方々が参加することで魅力あるまちづくりを実現しています。

事例のまとめ

- 地域の歴史的資源を住民が主体的に管理・運営し、地域の学校との連携やサポーター制の導入など様々な事業を企画・実施しています。

市民センターを軸に 地域ネットワークを。

「吉成地区地域懇談会」

～吉成地区～ 事例02

各種団体の交流をコーディネート 市民センターから地域コミュニティの活性化へ

市民センターを活用して、
地域団体同士の交流を深める。

「1年間かけて地域団体とのつながりを作り、19年度の第1回目の交流会を市民センターで行いました。40団体以上集まりましたね」と、吉成市民センター館長の照井さんは語ります。

「なかなか普段話す機会のない方と話ができ、名刺交換もできてとてもよかった」と言う町内会長さんもいたと言います。

「『地域にはこういった団体や人がいるんだ』ということを知る、いい顔合わせになりました。市民センターが中心で実施していると言うことで、皆さん安心して参加できるのかも知れませんね」と吉成学区連合町内会会長の伊藤さん。

この交流会を機に、40団体の組織力を活かして、子育て、福祉、防災の3つのジャンルのネットワークを構築することになりました。今後それぞれ3つのジャンルごとに具体的に活動していく計画になっています。

数多くの団体の組織力と交流が、
新しい可能性と活力を生む。

「このネットワークで普段知り合う機会のない福祉施設の方とも知り合いになりました」とネットワークのメリットを語るボラネット杜の丘の渡辺さん。

「この地域は福祉施設が多いのですが、施設単独ではなく、ボランティア団体などと連携することで地域として支えていくことが必要だと思います。」

福祉や子育てはネットワークがなければ活動できません。障害者や母子家庭の子どもの送迎などは、保育所や児童館やボランティア団体が協力し、それぞれができることを話し合いながら行っていくことが大切です。

「防災においてもネットワークが大切です。今までこの地域は、町内会単位で防災活動を行っていましたが、ネットワークをきっかけに横のつながりが生まれてきました。」

これを機に吉成学区連合町内会で防災組織を立ち上げ、防災の手引きを作成し、全世帯に配布しています。

つながりを広げ 地域に新しい 「共助」の仕組みをつくる

ボランティア活動を支援し、
新たな地域の担い手を確保。

「市民センターではボランティア活動の支援も行っています。ボランティアを志す方々を対象に、地域の課題に即した講座を行います。地域の新しい担い手を育てることを目指しています」と照井さん。

このように生まれたボランティアをそれぞれのネットワークにつなげていくことも可能になります。例えば、折り紙ボランティアや傾聴ボランティアの方は福祉のネットワークに加わり、福祉施設を訪問するなどの活動を行っています。

「このような連携は、団体交流会で顔見知りになっているからできることです。それぞれのネットワークに入って活動しやすくなっています。」

「仲間づくり」としての
「共助」の仕組みづくりへ

「共助とは一言で言えば『仲間づくり』です。いざという時に助け合える仲間づくりが、これからの地域コミュニティに必要なと思います」と伊藤さん。

「他の団体にサポートをお願いする時も団体の特徴を知ることが大切です。特徴を

事例のまとめ

- 市民センターを中心として、地域の各種団体とのネットワークを構築し、災害時の「共助」の仕組み作りなどを行っています。



理解することで特徴にあった協力をお願いできます。例えば、老人クラブは労働力は出せないけれど、いろいろと知恵を出していただけますから。」

子ども会、老人クラブ、趣味の会、体育振興会などの組織と連携すれば、人も集まるいろいろなアイデアも出ます。困っている時でも、他の団体に普段顔つなぎをしておけばいろいろとサポートもお願いしやすいものです。

「今後の防災訓練は『共助』をテーマに行っていきます。その場合、町内会単独ではできません。横のつながりを重視して、ひとつの団体や町内会ではできない『共助』の取り組みもどんどん取り入れていく予定です。」

「こんな工夫もしています！」

企業も視野に入れて ネットワークづくり

ネットワークの活動をさらに充実したものとするために、地域にある企業とのつながりを深めていきたいと考えているそうです。こうしたことから、今後企業との懇談会などの開催を考えています。

若い情熱を 地域活動へ。

「青年部による地域課題解決」

～八木山南地区～ 事例03

アンケートにより地域の課題を把握 課題解決の実行部隊として青年部を結成

地域課題をしっかり把握。
災害時要援護者支援の取り組みへ。

町内会や社会福祉協議会の主役は住民。住民が何を考え地域が何を求めているかを知らないで、地域活動を進めることはできません。そこで八木山南地区では、町内会や社協に何を望んでいるのかを把握するため、住民を対象としたアンケートを行うことにしました。

「その中に、災害時に自力で避難できないという回答があり、これは見過ごせないと考えました」と八木山南地区社会福祉協議会会長でもあり同地区連合町内会青年部長の阿部さん。

「さっそく支援を求めているお宅へ訪問し、それぞれ希望の支援者を挙げてもらい要援護者の名簿を作り上げました。」この名簿をもとに、災害時における要援護者への声かけなどの支援が可能になっています。

このように地域課題をしっかりと捉えて地域全体で解決にあたらそうとしている八木山南地区。現在は「世代間交流による地域活性化と人材育成」をテーマにした「街づくりプロジェクトチーム」をスタートさせています。

地域課題解決の実行部隊として
連合町内会青年部を結成。

「地域課題解決のためには大きなうねりが必要です。今後、地域活動を精力的に広げるために仲間がいた方がいいということで、連合町内会長に頼んで青年部を作らせてもらいました。」

青年部は地域課題を解決する実行部隊。PTAなどに声がけた結果、30代から50代の16名が集まりました。「町内会長が中心に集めるとどうしても同年代の人しか集まりません。地域で活動している人望の厚い若い人に声かけをまかせると自然と若い人たちが集まりますね。」

誰しも期待されるとやりがいがあるもの。若い人に自由にやってもらうことで青年部の活動も活気を帯びています。「若い人は発想が面白い。前向きな意見は明るい場所に出るんだよと言われました。以前は集会所に集まっていたんですが、最近は明るいファミレスでやっています。」



地域を巻き込む 若い世代の熱い思いが 町内会を活性化させる

青年部が中心となって全住民で行う
防災体制の構築へ。

「要援護者支援の仕組みができあがったので、今度は住民全員で行う防災対策の取り組みを始めようということになりました。」

災害時の行動マニュアルや被害状況を把握するための調査表を作成して全戸に配布しています。

「災害に備えるための活動もしています。災害時、救援活動などに協力していただく人的協力者と、毛布や消火器などの物資を提供していただく物的協力者を募りました。また、不足している機材は連合町内会・地区社協が連携して購入しています。」

さらに、近隣の病院に被害者の受け入れをお願いして回り、協力を得ています。

これらを青年部が中心となって実施。若い力で全住民対象の防災対策の仕組みを完成させました。「八木山南地区が全住民を対象にした防災対策を実現できたのは、青年部という若い力があつたからこそです。若い世代をしっかりと地域活動に取り込むことが大事ですね。」

住民の共感を得る広報もしっかり。
若い人にも理解してもらえる。

地域住民に町内会が今何を考え、何をしようとしているのかを知ってもらうために広報にも力を入れています。「『いま〇〇〇の検討に入りました!』というように注意を引くような形でチラシを作って回覧してい



ます。一つの文章をできるだけ短くしたり、勝負どころではカラー印刷にするなど、見やすく目に留まる工夫もしています。やっぱり、若い人たちの作るものはセンスがいいですね。」

男性の参加を促すような文言を入れることもしています。その成果があつてか、災害時の人的協力者は40代の男性が一番多く集まりました。

「熱く語り、熱くPRしていけば、住民にも声は届くし、若い人たちも集まります。仲間を増やす喜び、住民から感謝される喜びを感じています。」

こんな工夫もしています!

集会所を地域活動の拠点に

連合町内会をお願いして、集会所に平日6時間程度管理人が常駐しています。会計や配布物の振り分けなど連合町内会の事務もしてもらっています。これにより役員の負担を軽減することができます。

事例のまとめ

- 地域課題把握のためにアンケートを行い、課題解決の実行部隊として青年部を設立し、若い力を地域に役立てています。

地域みんなで 子どもを守る。

「子ども安全パトロール活動」

～南小泉CSN(チャイルド・セーフティ・ネットワークス)～ 事例04

町内会からの協力 地域に根ざした防犯活動

信号機の設置から始まった、 地域で子どもを見守るボランティア。

「都市計画道路を拡張した場所に信号がなかったんです。通学路にもなっていて、小学生が横断する時危険なので、関係機関に働きかけ信号機を設置してもらったんです」と南小泉CSNの原さん。

この働きかけを機に、平成16年に南小泉CSNを設立。地域の子どもの安全安心・健全育成を目指し、精力的に活動しています。

「関西の方で小学生を狙った事件が起きたことから、地域でも何とかしなくちゃいけない、ということになり、防犯ボランティアを集うことにしました。」そこで始まったのが子ども安全パトロール活動です。

ボランティア推薦や通学路点検への参加。 町内会の協力で防犯活動。

ボランティアは60代を中心に30代から70代まで幅広い年齢層が集まりました。

「子どもと接する防犯活動ということもあり、どんな方にボランティアになっていただくかと慎重になります。その点、町内

会からしっかりした方を推薦していただいておりますので、大変助かっています。」

このように地域に広がりを持ったネットワークとなっていますが、最初は地域と協力関係を築くのも大変だったとか。「町内会もいろいろと取り組みたいのですが、忙しくて手が回らないのが現状。そこで町内会長さんと相談して、南小泉CSNが音頭取りをさせていただいて、町内会に協力をお願いするという形で進めることにしました。」

南小泉CSNが主催して昼と夜の通学路の安全確認をする通学路点検を定期的に行っていますが、こちらも町内会や防犯・福祉部の方などに協力いただいています。「地域を決めて行っていますが、それでも私たちだけでは大変です。町内会からの協力は大変助かっています。」



地域の中で良い関係づくり 問題意識も共有して 活動をより広範に

防犯効果も高い、ついでに
「おついでパトロール活動」。

「新しい通学路は、人通りも少なく、不審者や犯罪者に付け込まれやすいと感じたんです。」

決まった時間やルートのパトロールだと、活動する方にも義務感が生じ、人員確保も難しく、なかなか続かないのが現状。そこで考えたのがなにかの『ついで』に行う「おついでパトロール」。その中で一番活発なのが犬の散歩のついでに行う「ワンワンパトロール隊」です。

「好きなときに負担なくできるのがこの仕組みの良いところです。」また、「不定期な方が予測不可能で犯罪者も嫌がると警察の方も話をされています」と、犯罪抑止力の面でも効果的なようです。

「ジャンパーや腕章を付けてパトロールしていると、お巡りさんや学校の方が挨拶してくれます。『警察の人?』なんて子どもたちに聞かれたりするんですよ」と楽しそうに話す原さん。

しっかり活動を告知していくことも必要と考え、広報紙も配布。経費を削減するためにPTAの広報紙の裏面を活用するなど工夫もしています。

事例のまとめ

- 地域団体と町内会が協力し、「おついでパトロール」の仕組みを構築し、地域ぐるみで子どもの安全安心の確保に努めています。



問題意識の共有が
安心できる地域づくりにつながる。

現在南小泉CSNでは、防犯について考える機会を設けるために年1回防犯交流会を実施。「南小泉CSNの主催で行っていますが、町内会の方々にも参加いただいています。防犯に対する問題意識を広く共有すれば、さらに効果もあがり安心な地域づくりができるのではないのでしょうか。」

地区の交番のお巡りさんから地区の犯罪状況の話をしてもらったり、警備会社の方の話を聞いた後、グループディスカッションを行ったりと、活発にコミュニケーションを図っています。「地域に子どもたちを守るという意識が広がり、そしてもっともっと根付いていくといいですね。」

こんな工夫もしています! /

ちょっとした遊び心も大切な要素

まじめな取り組みだけに、ちょっとした遊び心も大切。ワンワンパトロール隊では、犬の名前の入ったシャツを犬に着せることにしています。パトロール中に地域の方に声を掛けられることも多く、ボランティア活動の充実感が得られ、活動を継続していくモチベーションにもなっています。

地域一体となって 次の時代を育む。

「栗っこネットワーク」

～栗生地区～ 事例05

学校と地域が一緒になって 子どもたちを見守る

地域福祉の向上・子どもたちの健全育成・
障害児理解の3つを目標に。

「栗生小学校設立の際に、すべての子どもたちの健全育成を支援したいと話合ったんです」と語るのは栗っこネットワークの事務次長の大木さん。

そして、「誰でも安心して暮らせる地域づくり」を目指し、地域福祉の向上・子どもたちの健全育成・障害児理解を会の主旨とした「栗っこネットワーク」が誕生しました。

今でこそ学校と地域が連携している地域ぐるみの活動として注目されていますが、最初は学校の先生と大木さんと障害児学級の保護者の4～5名でスタート。「まず、行動していこう。枠にとらわれない交流の場を提供し、やれることから活動して多くの方に知ってもらおうことから始めました。」

町内会との連携で
地域一丸となった体制。

活動が地域に浸透していなかったせいか、活動開始から2年目くらいに、PTAとの違いが分からないといった声がありました。そこで、学校長と事務長と各町内

会長で話し合いが行われ、「これからは学校と地域がより一緒になって子どもたちを見守り育てていく必要がある」ということを改めて確認しました。

「それ以降、苦勞していたスタッフ集めも、地域の協力のもと円滑に進むようになりました。特に町内会長さんは、忙しいのにも関わらずそれぞれ栗っこネットワークの会長や顧問を引き受けてくださっていて、栗っこネットワークの意義も認めていただいています。」

また、理事として各町内会から2～3名参加、その他、地域の方が20～30名参加するなど、組織体制も整ってきました。



栗っこネットワーク内で 世代や立場を超えた交流 活発な意見交換が成功の要因

地域に根ざした活動を目指す
「4つの委員会」を立ち上げ。

「現在、広報を行う『おしらせ』、子どもの健全育成を目指す『ふれあい』、障害者の理解を目指す『たすけあい』、地域福祉の向上を目指す『かたらい』の4つの委員会で活動しています。親しみやすいテーマで地域に根ざした活動を行っています。」

この4つの委員会が1年を通じて無理なくいろいろな取り組みを展開しています。

「例えば、『ふれあい』委員会では、蕃山登山を行った後に芋煮を食べたり、サイカチ沼の不法投棄がひどいということで清掃活動を行って、その後に芋煮を楽しんだり。楽しいふれあいの活動を毎年1回行っています。」

こういった取り組みを、「おしらせ」委員会では、会報「栗っこ」により町内2,600世帯に配布しています。

幅広い世代が交流。
自由な意見交換が明日への糧。

「栗っこネットワークは、40代・50代を中心に、上は70代の先輩世代まで幅広い年齢層の方が参加しています。この世代の広がり組織の運営に良い影響を与えてくれていると思います。」

幅広い世代や、いろいろな立場の方が出て、異なった視点から様々な意見が出て、役員会でも勉強になるようです。

「年齢が上の方の話は説得力がありま



す。現役で働いているお父さんたちのまとめる能力にも感心します。」

「いろいろと活動を広げている栗っこネットワークですが、組織が大きくなって、当初の目的を再確認することが必要になってきました。今後もいろいろな問題を会議の中で自由に気兼ねなく話し合える栗っこネットワークでありたいと願っています。」

「様々な世代や立場の方たちが栗っこネットワーク内で交流し、楽しく活動していることは、これからの地域活動にとっても大切な財産だと思います。」

こんな工夫もしています!

栗っこネットワークでの交流が 町内会活動にも好影響

栗生地区では、以前から連合町内会を中心に町内会の交流はありましたが、栗っこネットワークを通じて、地域の様々な団体間の交流や団体の会員間での交流がさらに図られています。この交流により、他団体の活動を知る良い機会になっています。

事例のまとめ

- 町内会と学校とPTAが連携し、幅広い世代とさまざまな立場の方が活発に交流しながら様々な活動を企画・実施しています。

畑のパワーで町を元気に。

「まちなか農園藤坂」

～花壇大手町町内会～ 事例06

様々な団体との連携により「まちなか農園」を整備・運営

NPO 法人との連携で新しい農園づくりにチャレンジ。

「町内にある1,000坪の道路建設予定地が資材置き場となっていて、地域住民から、景観上・防犯上・交通安全上良くないという意見があがっていました。そんな時、農園として活用したらいいのでは、という話が出たんです」と語る花壇大手町町内会会長の今野さん。

町内会で話をした結果、地域の交流のため、ぜひやろうということに。「まちなか農園藤坂」という名称で地域の農園づくりが始まりました。

「ただ、町内会で畑づくりをやったことがあるわけではありません。どんな風に進めたらいいんだろうと悩んでいた時、先行して他の地区でまちなか農園を運営していたNPO法人にいろいろと農作業の仕方などを教えていただきました。そこで知ったノウハウやネットワークが『まちなか農園藤坂』の実現に大いに役に立ちましたね。」

連携の輪が広がり若い力で着々と進む農園づくり。

畑の整備作業等は町内会とNPOが連携して実施。

「いろいろと手探りでしたが、NPOとのつながりのある団体など、さらに連携の輪が広がり、順調に農園づくりは進みました。大学生を中心としたボランティアの協力が大きな力となりましたね。」

農園の土留めは、農業高校の学校林の間伐材を使って生徒に行ってもらい、通路作りや草刈りは大学生と地域のボランティアに手伝ってもらいました。

また、畑の水やりに雨水を利用していますが、その雨水を溜める桶は市民団体の協力により設置されました。



多彩に広がる畑のパワー 地域活性化につなげる

農園を活用したイベントにより地域を活性化させる。

「農園で採れた作物は地域にいろんなものをもたらしてくれます。収穫物を使って料理教室を開催したり、藍の花で藍染めをしたり、収穫祭を開催するなど、コミュニティの活性化に利用しています」と言う今野さん。

様々な趣向を凝らして収穫物を使ったイベントを開催。例えば農園整備の際に協力してくれた農業高校の生徒と地域の方で、バラの花びら染めと交流会を開催。大変好評で多くの人で賑わったそうです。

「畑の人を引きつける力はすごい。畑を耕す人、見る人、食べる人などいろいろな関わり方があっていいのではないのでしょうか。」

地区では高齢化が進んでおり、商店もなくなってきていて、日常の買い物もとても不便な状況になっています。そこで、農園指導に来てくれている農家の方に、野菜などの直売所を月2回開いてもらう取り組みも始めています。農園を多彩に活用することで地域に元気が生まれています。

日常の取り組みを通して、人と人とのコミュニケーションが図られる。

「農園の管理は手間暇がかかって大変ですが、この日常の大変さがあるからこそ、人々の愛着も深まり、地域につながりが生まれるのかも知れません。」

農園の管理は、40人を4つの班に分けて



10人で7日間を受け持つという形をとっています。都合の悪い日は休むことができ無理なく活動できる体制となっています。

畑はオープンなところが魅力。人々の間に自由な会話が生まれ、コミュニティが活性化します。一人でやっても面白い、みんなでやったらもっと面白いということで、農園を通していろいろなネットワークが広がっています。

こんな工夫もしています!

町を再生するランドデザイン作成委員会を立ち上げ

花壇大手町地区の町内会が主体となって町の活性化を考える「ランドデザイン作成委員会」を発足させています。地域のお祭りなどの文化活動や安全対策を始めとする5つの分科会のもと、「住み良いまち」を目指し、地域課題解決に向けて活発に活動しています。

事例のまとめ

- 農園を活用した多彩な事業を企画・実施し地域交流を図るとともに、管理・運営においてNPOを中心とした地域外の様々な団体と連携しています。

「防災」を軸に 全員参加のまちづくり。

「先進的な地域防災体制づくり」

～福住町町内会～ 事例07

防災活動はまさにまちづくり 住民一体の地域コミュニティへ

名簿・マニュアル作成から防災訓練まで。
先進的な防災対策を実施。

先進的な防災対策で知られている福住町町内会。「平成15年の宮城県北部地震で一気に防災への意識が高まりました」と語る会長の菅原さん。

この地震を機に総合的な防災対策活動を開始。住民調査により1,000人の町内会会員名簿もすぐに完成しました。

「次に取り組んだのが、防災に関する総合的なマニュアルを作成し、町内会全世帯に配布することでした。」内容は、組織体制、災害調査表、連絡網、避難場所など完成度の高いものです。この防災マニュアルに沿って町内をあげて防火・防災訓練を毎年行っています。

町内あげての本格的な防災訓練。
1年交代で5つの班をすべて経験。

「災害時に必要なことを漏れなく行うために5班体制の組織を作りました。」

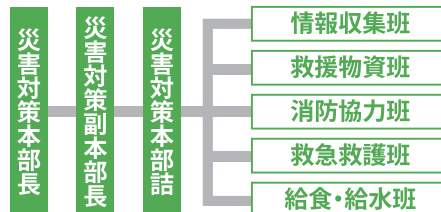
町内会長をトップとした災害対策本部の下に5班を設置。高齢者の安否確認、家屋の被害状況の把握、初期消火、負傷者の

応急処置などを各班で分担して行うことにしています。

「災害時に重要なことは、住民一人ひとりが防災に必要なことの全体像をしっかり把握していることです。そのために町内会の会員全員が防災訓練に参加することを前提にし、会員全世帯に割り振りをし、1年交代で5年ですべての班を経験できるようにしています。」

5班体制による防災訓練の成果は、平成20年の岩手・宮城内陸地震でも活かされました。「地震発生後すぐに住民の安否確認を行い、区役所への被害状況の報告も訓練どおりにできましたね。」

災害時の組織図



町内会の役員体制も充実 より多くの人に関わる中で 防災ネットワークを拡充



いろいろな工夫。
より多くの人参加を目指す。

「防災訓練への参加を促す工夫として、子どもたちが行ってみたいと思うような取り組みもしています。子どもを呼べば親御さんも一緒に来てくれます。お祭りと同じ感覚でやっています。」子どもが喜んで参加できるようにと、スタンプラリーを実施したり、企業にお願いして、福住町を上から眺めるための高所作業車を用意したり、参加証明書を配ったりと、様々な工夫をしています。

このように大々的な規模で訓練を行っている福住町町内会ですが、訓練自体は資材を持ち寄ったり、場所を提供して企業に災害対策用品などの展示をしてもらったりしているため経費はほとんどかかっていないようです。

初めから完成された訓練を行うことは難しいものです。「防災訓練はとにかくできることから始めることが必要です。事前に人が人や倒壊家屋などを決め、当日係の方がその情報を収集するというようなことは比較的始めやすいと思います。」

地域を巻き込んだ体制づくり。
役員の人数は町内会世帯数の1割。

これだけの大規模な取り組みが円滑に行われている背景には、10人を超える副会長を含めて40人ほどの役員体制を敷いているということがあります。この数字は

町内会の世帯数の1割に達するものです。多くの方に役員を経験していただくことで、自主性と責任感が生まれ、様々な行事や活動がスムーズにできています。

なかなか若い人材を巻き込めない時代において、執行部内に若い方が多いのも特徴のひとつ。例えばPTAの役員をした方たちに婦人防火クラブの役員になっていただくなどの取り組みをしています。「自分から役員になりますという方はあまりいませんからね。PTAなどの活動をきっかけに、町内会の活動に入ってもらおうというような道すじを作っていくことが大切です。」

こんな工夫もしています！

他町内会等との災害時協力協定 防災の輪が広がる

災害に強いまちづくりを目指して、他の地域と協力協定を結んでいます。万が一の時でも、他地域から物資やボランティアの提供を受けることができます。新潟県で発生した2度の地震でも緊急援助物資の提供を行いました。

事例のまとめ

- 全世帯参加の防災訓練を実施し、また、多くの方に役員を経験していただくなど、より多くの住民が参加する地域づくりを行っています。

ごみ対策を旗頭に 町内会同士が連携。

「六七美化一揆連絡会」

～六郷・七郷地区～ 事例08

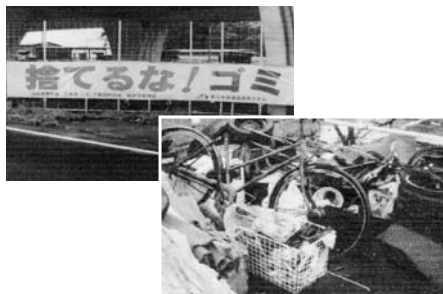
不法投棄という地域課題を 周辺町内会との協力により解決

増加するごみの不法投棄。
8町内会が立ち上がった。

「仙台東部道路ができた時期から、車・ベッド・電化製品などのごみが捨てられたり、野菜を盗まれたりということが増えました。町内でパトロールを行いました。とても間に合わなくなってきました」と当時の様子を語る六七美化一揆連絡会会長の大友さん。

何とかしなければいけないということで、仙台東インターチェンジから名取川堤防までの8つの町内会に声がけをしました。「区役所から連絡を取ってもらい集まってもらいました。地域の問題として皆が認識していたので、当初から各町内会長の理解は得られましたね。」

さっそく、8つの町内の想いがひとつになり、東部道路の東側の沿線を清掃する



「六七美化一揆連絡会」が平成19年に発足。その年は約350名が参加、次の年は約460名に参加者が増え、取り組みは地域の住民全体に受け入れられています。

町内会を超えた連携へ。住民の意識も
高くごみ70%減という効果も。

毎年9月中旬に行われる大清掃イベント。東部道路の側道約6kmを4ブロックに分けて実施。8つの町内会が総出で行います。「清掃内容は、ごみ拾い、草刈り、泥上げなどです。1日で不燃ごみ2.7t、散乱ごみ1t、草類6.3t、土砂30tという膨大なごみが集まります。」さらに、大清掃イベントの当日だけでなく、日常的な取り組みもしています。昨年は監視カメラを取り付けたり、ごみを捨てないようにと書いた町内会の名前入りの横断幕を設置したりしています。

「このような地道な取り組みと年1回の大清掃イベントによって、全体でごみが70%減るといった効果も出てきています。家庭ごみ有料化に伴って不法投棄が増えるのではと、さらにパトロールも強化しましたが、今のところ問題はないようです。」

住民主体の美化活動 地域のパワーを集約して まさに「一揆」といえる形で結実

広がる地域活動の輪。
周囲からのサポートも拡大。

「六七美化一揆連絡会」は現在、六郷・七郷地区防犯協会、若林区中央幹部交番、東日本高速道路などの各関係機関も参加した大きな取り組みに発展しています。

「昨年、参加していない東部道路沿線の町内会から参加の申し出がありました。同様の課題を抱えた他地域にも影響を与えているのかも知れませんね。」

今年は企業の参加も予定。新聞等に取り上げられたことで企業側から問い合わせがありました。

さらに、地域での取り組みを知って、近所の運送会社も「地域にお世話になっているから」と日常的に草刈機で清掃活動をしています。地域住民の活動からネットワークがどんどん広がっています。

「これだけ大きな取り組みに発展すると、安易にごみを捨てることもできなくなっていますし、防犯効果も高まっています。地域活動もどんどん活発になるのではないのでしょうか。」

住んでいる人の中から出てきた活動。
だからこそ持続できる。

六七美化一揆連絡会立ち上げをきっかけに住民意識はさらに盛り上がっているようです。「名称の由来は、六郷・七郷にまたがる町内会による住民主体の自主的な美化活動を『一揆』に例えたものです。地域



のパワーがいい連携を生んでいます。」

この地域の若い世代は、この土地に生まれ、農家の後継ぎとなる人が多いそうです。自分たちの町内の「美しい田園風景を守る」という意識も高く、参加も多いのが特徴です。

「地域の問題は地域の中から盛り上がらないとだめです。住んでいる人の中から出てきた活動だからこそ持続できると思いますね。」地域でしっかり取り組みればごみを捨てない習慣が身に付くなど子どもにもいい影響があるのではないのでしょうか。

こんな工夫もしています!

美化活動から 防犯活動へも広がっています

最近是不審者が多いので青色回転灯を町内会で用意し、学校の下校時間にパトロールを行っています。名取川で子どもたちが遊んだりするので河川のパトロールも行います。

事例のまとめ

- ごみの不法投棄という共通の地域課題を抱えた町内会が連携し、関係機関を巻き込みながら大規模な清掃活動などを行っています。

心に種をまく。 人の輪が花開く。

「ふれあい交流花壇」

～土手内若葉町内会～ 事例09

不法投棄が続く荒れ地を みんなの手で「花壇」として再生!!

一年中季節の花に囲まれた町内。
ふれあいのシンボルとなっています。

太白区にある土手内若葉町内会。町内5ヶ所の公園に花壇が作られ、一年中いつでも季節の花に囲まれた光景が見られます。特に、町内の中央にある「ふれあい交流花壇」は、憩いの場所として、町内を明るく華やかにするふれあいのシンボルとなっています。

しかし、今でこそ想像もつきませんが、ふれあい交流花壇のある場所は、数年前までは粗大ごみの不法投棄に悩まされた「荒れ地」だったのです。

不法投棄が続いたこの場所を何とかしたい。町内のみんなが集まって相談した結果、「花壇」を作ろうということになりました。

ひとつひとつ地道な努力。
みんなで力をあわせて荒れ地を再生。

「最初は大変でした。土が固くなっていたり雑草が生えていたり。こりゃだめだ、ということで、まずは、土壌づくりから始めたいです」と花壇施設幹事の佐藤さん。工事資材や砂利が置かれ、とても花づくりに適した土ではありませんでした。そこで、町内の

墓石屋さんに機械を借り一緒に土を砕いたり、トラックで新しい土を運び入れたり、まさに町内あげての土壌づくりから「ふれあい交流花壇」の取り組みが始まったのです。

花壇園芸委員を町内の回覧で募集。花が好きの人が集まり、10名が活動を開始。皆さん意欲的です。

一言で花壇づくりと言ってもやることは多種多様。育苗、枯花摘み、雑草取り、花種の選定、花苗の配置、花株の植え替えなど。また、ふれあいの場として利用できるように、日除け雨除けのできるふじ棚と手作りのガーデンテーブルやベンチを設置。花壇園芸委員が中心となって力を合わせて作業を進めました。作業は専門書を参考にしての試行錯誤ですが、みんなで一から作り上げる楽しさを感じています。

毎年数々の賞を受賞



平成20年度・夏花壇

花のあるまちコンクール (最優秀賞)

その他数々の賞を受賞しています。

一年中花が咲く町 いつもみんなの笑顔が集う 地域活動のシンボル

町の人々が集う風景。
お年寄りが集まって井戸端会議も。

「ある日花壇を見に行くと、ベンチに座って中学生二人が仲良く勉強していたんです。花壇も定着してきたのかなと嬉しかったですね」と佐藤さん。

5年目を迎え、小学生からお年寄りまで、ふれあいの場所として定着してきました。芋煮会やバーベキューなどの町内のイベントにも利用。お年寄りが集っての井戸端会議など、最近見かけなくなった光景も目にします。

また、「ふれあい交流花壇に1時ね!」というように待ち合わせの場所にもなったりしています。

町を華やかにするこの場所
今、町のシンボルとして花咲いています!

「毎年花壇のレイアウトを変更したり、春早く花芽のつく樺やさざんかを垣根に植え一年中花が咲いているように工夫をしたりしています。いつでもこの場所に来て欲しいですからね。」きれいな花壇を見に行くのを楽しみにしている人も多いとか。笑顔が集う場所があることで、町内全体の明るさにつながっています。また、花壇づくりに創意工夫を凝らすことで、花壇園芸委員の方々の意欲も高まっています。

事例のまとめ

- 粗大ごみの不法投棄に悩まされていた場所に花壇を造り、地域のふれあいの場として利用することで、地域課題が解決し住民間の交流も図られています。



さらに、花壇園芸委員の一生懸命やっている姿を見た近所の方から「うちで植えている草花でよかったら移植して!」と草花を提供してもらったり。「町内のみんな花壇づくりをするんだ」という雰囲気広がっています。

「ふれあい交流花壇」はこの5年間で町内の人たちの心に根を張り、今日も大きな花を咲かせています。



こんな工夫もしています!

委嘱状と感謝状で意欲を向上

花壇園芸委員の方には、町内会長名で委嘱状を出しています。また、4年間続けた方には、町内会から感謝状を贈呈。花壇園芸委員の方の意欲が高まり、地域社会のために貢献しているんだという実感が得られます。

愛される紙面を 地域とともに。

「広報なかだ」

～広報なかだ編集委員会～ 事例10

地域の声を反映するために 地域から選ばれた編集委員体制を

地域の編集委員が一緒になって
地域に役立つ多彩な紙面づくり。

「地域の方という交流を持っている中で、『編集委員にならない?』と声がかげがあったんです。今では学校のサークルのように楽しく紙面づくりをしています」と語る広報なかだの編集委員の皆さん。編集会議の雰囲気も明るく、一緒に作っていく楽しさを感じているようです。

昭和46年から発行を続けてきた歴史のある「広報なかだ」。以前は市民センターの職員と公民館運営協力委員会が協力して発行していましたが、地域の広報紙として、もう一歩地域の中に踏み込んでいこうということで6名の地域住民からなる編集委員体制になりました。

「地域の人に役立つ地域に根ざした広報にしたい。地域の声をもっと紙面に反映させるため、私たちの責任も重大です。」

地域の動きにアンテナを張り
様々な地域情報を住民に発信。

以前、編集委員の間で、もう少しだけたトレンド情報紙のようにしようという話が出ました。しかし、「地域的话题を伝えることで地域に目を向けてもらうことが大切。地域の情報をしっかり発信していこう」と方向性を再確認した経緯がありました。

あくまで地域に根ざした広報紙。例えば、「人物往来」というコーナーで、地域の学校や交番に勤務する方の異動情報を掲載したり、地域の学校のブラスバンドの話や、スポーツ行事の結果を扱ったり細やかな取材で地域情報を掲載しています。

「新しく中田に来た方に地域を知ってもらうため町内会の紹介のコーナーも設けました。普通では話もできないような人に取材に行ける楽しさもあります。」

毎年恒例の行事を取り上げる際も、視点を変えて記事を書いています。知っているようで知らなかった地域の情報も多いようで、読者からは「面白かった」「読み応えある」という声も届いています。紙面を通して地域の人々とコミュニケーションもとれているようです。

地域との連携を密にする 地域に根ざした 広報紙づくり

地域の方や地元企業も協力。
地域とともに運営しているという実感。

「地域にはいろんな活動をされている経験豊富な方や、いろんな才能のある方がいます。そういった方々の知恵をお借りして紙面づくりを行っています。」

編集委員の中にも元PTAや連合町内会など地域の各種団体に活躍している方がいます。日頃の経験をもとに、自分の得意分野を中心に記事を書いています。「我が家のおいしいレシピ」というコーナーは編集委員ではない料理好きな連合町内会の婦人部の方が書くなど、地域の方も積極的に参加してくれています。



また、「印刷屋さんにも地域の情報紙であると理解していただき、価格の面でご協力いただいております。」

こんな工夫もしています!

地域活動の中から人材を発掘

地域の活動をされている方のネットワークの中から編集委員を探しています。PTAの行事に連合町内会の婦人部が参加したり、市民センターの講座の運営委員を地域の各種団体の方に手伝ってもらうなど交流をしている中から声がかげをしています。



編集ボランティアが続くのは
一緒に作ることが楽しいからこそ。

幅広い年齢層の編集委員が違った視点からお互いに意見を出し合い、広報を作っています。「先輩たちのおかげでいろんなことを勉強させてもらっています。」

常に明るく元気な編集会議。集まって談笑している中から次の記事のアイデアが出てくることもあります。

「『あそこに音楽スタジオができたんだって』『誰が始めたの?』という雑談から『記事にしたら音楽好きの子どもが使わんじやない?』という話になったこともあります。」
「身近な話題を楽しく読んでもらうのは大変。でも、みんなでアイデアを出し合い、楽しくやっています。」

まちを愛し、ふれあいを楽しんでいるからこそできる地域の広報紙。今後も地域に関心の高い編集委員を集めていきたいと考えています。「こんな楽しいことは多くの人に経験して欲しいですね。」

事例のまとめ

- 幅広い年齢層の編集委員が活発な意見を出し合いながら、地域に関する様々な情報を掲載し、地域に役立つ、地域に根ざした広報紙を発行しています。

地域の祭りで 町に元気を。

「フライハイおいで」 「コミュニティまつり」

～生出地区～ 事例④

地元で根ざした凧揚げ大会で 地域コミュニティが活性化

地域に根ざしたイベントで
地域が活性化していく。

全国的に有名になった凧揚げ大会「フライハイおいで」と秋の風物詩である「コミュニティまつり」の2つの大きな行事を実施している生出地区。生出市民センター運営協力委員会委員長の山田さんは、地域の祭りやイベントがいかに地域の活性化に貢献しているかを強調します。

「地域の活性化には、隣同士や地域のコミュニケーションが大切になります。このふれあいの場を作っていくうえで、こういった地域のイベントは大変有意義です。」

「フライハイおいで」は3月に、「コミュニティまつり」は10月に開催。「2つのイベントの準備で一年を通して忙しい日々が続きます。苦労も多いですがこのイベントのおかげで町は元気なんだと思います。」

伝統的な風習を
地域密着のイベントとして活用。

「『フライハイおいで』は昔この地域にあった『するめ天旗』という凧を揚げる風習から始まりました。」

その後、話題を呼び全国から凧好きが集まる大きなイベントに発展。しかし、大会の規模が大きくなるにつれて地域色が薄くなるという面も出てきました。「地域の活性化という観点から、もう一度原点に戻って地域密着の運営に見直しました。」

地域密着のイベントとして個人的に参加する方も多く、さらに各町内会も大凧を製作。天に舞う大凧が大会を盛り上げています。「12帖もあり製作も大変。しかし、大凧づくりを通して、町内会にいい絆が生まれています。」

地域の小学校や福祉施設からも参加。卒業記念などに凧づくりを取り入れている学校もあります。福祉施設は普段あまり地域と関わることがないのでこのイベントが良い機会になっています。

イベントを通して強い絆づくり 交流を育みながら 地域の活性化に結びつける

もうひとつのイベント「コミュニティまつり」。
しっかり顔の見える地域づくり。

生出地区のもう一つの地域イベントが「コミュニティまつり」。地域の絆づくりには欠かせないイベントです。「今年で30回目の開催。行事を重ねていくことで交流が生まれ、顔の見える関係も生まれています。」

毎年、歌あり、踊りありの楽しいお祭り。秋の風物詩として楽しみにしている人も多いいと言います。地域の方の期待に応えられるようにと「コミュニティまつり」もいろいろ楽しい催しを考えています。

「子どもたちが参加できるような工夫もしており、親子で楽しめるイベントになっています。昨年から坪沼小学校の子どもたちが実際に農作業をして作った米や低農薬野菜を、自分たちの手で販売をしています。売り方も元気ですぐに売り切れてしまっていて大人たちも驚いています。自分で作ったものを実際に販売してみることは、子どもたちにとっても良い社会勉強になっていると思いますね。」

安全安心や子育てや防犯対策も
地域の輪があつてこそ。

イベントを通じたつながりによって、地域の輪も広がっています。次世代に広がる地域の輪もその一つです。「小学生との交流として、幼児学級というものが生出小学校にあり、その支援を行っています。」

現在、学校だけでなく、家庭での教育・



地域での教育の必要性が叫ばれています。生出地区ではそんな家庭・地域教育をテーマにした講座も予定しています。また、親の働く姿を見ていない子どもたちが、地域の方の活動を見学する社会勉強も行っています。

さらに、生出小・中学校、坪沼小学校の地域の子もたちを地域で見守っていく「三校連絡協議会」も立ち上げています。地域に「まとまり」があると地域の「目」となり防犯効果を上げることができます。

「子育てにおいても防犯活動においても、人とのつながりが大切です。イベントをしっかりとやっていきたいですね。」

こんな工夫もしています!

災害時の即戦力として中学生を育成

災害があったとき、地域一丸で対応できるよう地域のこれからを担う人材を育成しています。例えば、市民センター、婦人防火クラブ、学校、連合町内会が連携して、中学校で防災訓練を行う予定です。

事例のまとめ

● 地域密着のイベントを通じて地域の交流を図ることで、子育てや防犯対策など様々な活動につなげています。

挨拶から 住民間の交流へ。

「マンションの自治会活動」

～ライオンズタワー仙台広瀬自治会～ 事例12

挨拶という日常の小さな取り組みから 住民全体の共通課題を解決へ

マンション特有の問題解決のために、
管理組合とは別に自治会を設立。

「管理組合はオーナーの組織なので、賃貸でお住まいの方は対象になりません。賃貸の方たちをカバーするためにも自治会を立ち上げました」と設立当時を振り返るライオンズタワー仙台広瀬管理組合法人理事長の佐藤さん。

全戸で404世帯、1,200名ほどの大規模マンションで、入居者は自動的に自治会や子ども会に登録となる仕組みにしています。

「防犯・防災、生活音や日常的なトラブルなどマンション特有の問題の対策をしていく必要があります。特にうちのように大規模なマンションの場合は、これらの問題を解決するためには日頃からの密なコミュニケーションが大切だと考えています。」

日頃の挨拶から始めた活動。
顔見知りの輪を広げて問題解決。

自治会の取り組みとして最初に行ったのが「挨拶」です。「最初はとまどいがありましたが、続けていくうちに挨拶をするもんだ

という風になってきました。マンション特有の問題があっても、挨拶をするような関係であれば大きなトラブルにはなりません。顔見知りになることが円滑なマンションライフには必要です。」

「防犯も挨拶から始めることが重要だと思います。挨拶をしてとまどう時はこの人怪しいなとわかりますから。挨拶はお金のかからない防犯対策だと言えます。」

マンションも「終の棲家」になっていて住民間での交流は欠かせません。コミュニケーションを図る取り組みが必要です。

「現在は毎月イベントを行い、活発に住民間の交流を図っていますが、マンションだけでなく、ご近所にも参加の声をしています。」マンション建設の際に近隣で反対運動が起きたそうですが、今ではご近所の方もイベントを楽しみにしてくるようになっていきます。



効率の良い運営で 交流を図り 防犯・防災につなげる

マンション挙げてのイベントが、
防災時のシミュレーションになる。

「防災も住民の賛同を比較的得やすい取り組みと言えます。ただ、訓練だけですべてを行おうとするととても大変になります。防災と行事の取り組みを一緒に行うことで、効率性も高まっています。いろいろなイベントを通して、シミュレーションや人の配置等の訓練をしています。」

夏祭りやクリスマスなどのイベントでも防災シミュレーションを行っています。配食の列をどこに作るか、雨の日や暑い日にテントをどこにどういった張り方をするのか、冬場の暖房はどのくらい必要かなど、イベントを1回行うと分かるようになります。

「敬老会の行事では、交流という目的に加えて、お年寄りの健康状態の把握等を行っています。」

効率的な行事運営
負担を減らして参加を促す。

「活動を行ううえで心がけていることは、できるだけ手間暇を減らして効率よくやること。最初の夏祭りの時、とても手間がかかったため、手伝ってもらった方に『もう懲り懲りです』と言われたことがありました。」

定型化できる部分は定型化して手間を省くこと。行事などはある程度パターンを決めて、段取りよく進められるようにしてい



ます。櫓や出店は外注するなど、可能な限り負担を減らしています。

「参加の敷居を低くして、手伝ってもいいかなと思っている人を積極的に探すことが大切です。参加を増やすために、『当日ちょっとだけでもいいから手伝って』というように声がけしています。」

維持管理などで住民全員に関わる問題が多いマンション。なるべく負担を減らし、イベントなどを通して手伝ってくれる人の輪を広げておくことが大切です。

こんな工夫もしています!

イベントでは
季節感を体感できる工夫を

最近日常の中であまり感じられなくなった「季節感」。仙台七夕やひな祭りやクリスマスなどの時期に、季節感を体感できるようにマンションのロビーを飾りつけています。

事例のまとめ

- マンション自治会を結成し、住民の交流を図るため、日頃の挨拶から活動を始め、行事と併せて防災シミュレーションを実施するなど効率の良い運営を行っています。

地域の人材を 地域に活かす。

「パソコン教室」「介護予防教室」

～燕沢コミュニティ・センター～ 事例13

地域の人材を活かし 地域に役立つ教室を開催

パソコン教室に介護予防教室。
喜ばれる講座を開講。

「何かを始めるには人材が必要です。地域活動においても地域の人材をうまく活用していくことが求められるのではないのでしょうか」と語る燕沢コミュニティ・センター運営委員会委員長の大西さん。

現在、コミュニティ・センターではパソコン教室と介護予防教室を開講していますが、どちらも地域の方が講師になっています。

「パソコン教室は40年近くコンピューター会社で働いていた自らのノウハウをもとにしたものです。最初は、パソコンの修理を頼まれたんですけど、そのうち、操作方法を教え始めパソコン教室にまで発展しました。いろんな人に喜んでいただけてこちらもうれしいですね。」

教えられる人を増やす。
教室から広がる交流の輪。

こうして始まったパソコン教室。現在は、基礎編から表計算・インターネットなどの応用編まで年間50回ほどの講座を開講しています。「高齢者が中心ですが、皆さんすごく熱心。頭の体操になると喜ばれる方もいます。」

いろいろな場所でパソコン教室が開講されていますが、高齢者には敷居が高くなかなか出向きにくいもの。「その点コミュニティ・センターのパソコン教室なら、近いし、周りは知り合いばかりで、分からないことも質問しやすくていいですね、という声が聞かれます。」

初めは高齢者向けの教室でしたが、若い方からも参加したいという声があり、今は年齢に関係なく参加してもらっています。

「すべての人を自分ひとりで教えるというのは無理。受講者の中から教えられる人を育てることを目標にしています。」

教室は4年目を迎え、他の人を教えることのできる人も増えています。自発的に近くの席で教え合うという風景も見られるようになったと言います。

コミュニティ・センターを 主体的に行う 地域活動の中心に

新たな地域活動の一貫として、
介護予防運動を今年からスタート。

「仙台市が策定したコミュニティビジョンを見て、コミュニティ・センターとして地域活動を主体的に行っていかなければならないと感じたんです。」

大西さんが参加した、区役所主催の介護予防サポーターの研修会で知り合った地域の方と一緒に、今年から介護予防教室を立ち上げることにしました。「お年寄りに怪我をされても大変。お年寄りの考え方、体力的なことなど基本的なことを分かっている方に教えてもらっています。」

91才の方も元気に参加される人気の介護予防教室。いすに座ったままのストレッチや、頭に刺激を与えるように指を動かすという誰でも気軽に参加できる内容になっています。「運動してみると気持ちがいい」と参加者にも喜んでいただいているようです。

地域の人材と出会うタイミング。
コミュニケーションを増やすことが大切。

「地域の活性化において中心的な役割を果たす。それがコミュニティ・センターの使命だと思っています。ただ貸し出しをするだけでなく、地域活性化に重点をおいた取り組みをしていきたいですね。」

そのためにも地域活動の担い手となる人材を発掘することが大切です。しかし、地域で人材がいても、なかなか周りは気



付かないことが多く、本人自身も言い出す機会がないというのが現状です。燕沢コミュニティ・センターで現在のように活発に活動が行われているのは、地域の人材と出会う時期とタイミングが合ったからだと思います。

「いろいろな人とコミュニケーションをとり、出会うチャンスを増やすことで、新しい人材と出会うことができます。もっともっと地域の中に出会いの場を増やしていくことが大切でしょうね。」

地域のふれあいを育むコミュニティ活動から新しい時代を担う人材が発掘できるのかも知れません。

こんな工夫もしています! /

地域の人材を活かした サロン活動を計画

燕沢コミュニティ・センターでは、地域の様々な人材を活かして、いろいろなことを学んだり、楽しんだりするサロン活動をしていきたいと考えています。このような取り組みから地域の交流を一層深めていきたいと考えています。

事例のまとめ

●地域の人材を活かしたパソコン教室や介護予防教室を開催し、コミュニティ・センターを地域交流の場として活用しています。

地域課題を主体的に話し合う。

「地域住民主体の話し合い」

～泉ビレジ館地区～ 事例14

ワークショップ(話し合い)を通して町内の課題解決を図る

地域の課題を共有する場としてワークショップを開催。

「平成15年に館地区の10周年誌を作成した際に、地域でパネルディスカッションを行いました。それをさらに進めようということでワークショップが始まりました」と語る館コミュニティ推進協議会会長の日比さん。

「地域には様々な課題があります。これらを共有し、解決していく場が必要だと考えています。その具体的な形として連合町内会主体でワークショップを実践しています。」

平成17年より地域すべての団体が参加したワークショップを開催。「安全安心の地域づくり」や防災や環境などのテーマで毎年ワークショップを行っています。

若い力も巻き込んで地域の課題にひとつずつ対応。

安全安心の面や街並み形成に関してアドバイスをいただこうということで大学との連携が始まりました。「防犯をテーマとしたワークショップで学生に参加していた

きました。学生さんに昼間と夜間の館地区を見てもらい、危険な箇所等についてどう情報を発信していくか学生の視点で意見をいただきました。」

話し合いの結果を受けて、不審者情報等いろいろな情報を小学校・児童館→連合町内会長→各町内会長という流れでメール配信できる仕組みを構築しています。必要に応じて町内の掲示板へ掲示するなどの対応も行っています。

「今年は館中学校と連合町内会、地域の諸団体、大学のボランティアサークル等が中学校の体育館に集まり防災のワークショップを行いました。館地区から周囲につながる3本の道にはすべて橋がかかっており、それが落ちれば孤立します。中学生を巻き込んだのは、外部からの助けを期待できないため地域内にいる中学生を含め地域一丸となることが必要だからです。」



自分たちの手で町の歴史・伝統・文化を創る

町内会同士の交流を深め、横のつながりを強くする。

館地区では地域全体の活性化を図るために、各町内会間の交流を大切にしています。ワークショップを通じて町内会同士に深い交流が生まれています。各町内会の行事にそれぞれ参加しあっているのもその一貫です。

「様々な取り組みに関する情報も交換しています。例えば、ごみ有料化に関して、ポスターを作成しごみ集積所に掲示しました。その中で、1丁目町内会のポスターが良かったので、他の町内会が参考にしました。」

イベントや祭りなどを通して、新興住宅団地に町の歴史を作っていく。

「館地区でも、大学入学・就職などで若い人が外に出て行ってしまおうという問題があります。出て行った若い人が戻って来てくれるように、魅力ある町にしていこうと考えています。」

年に1回位は戻ってきて欲しいということで夏祭りは盛大に行っています。今年で22回目で、毎年6,000～7,000人の方が中央公園に集まります。

他に、スプリングコンサートなども定期的に開催しています。また、コミュニティ・センターでは押し花・絵画・踊りなど様々な趣味のサークル、地域の学校や福祉施設の作品の展示会や発表会なども活発に行われ、地域全体を盛り上げています。

「歴史がない町なので、地域のイベントなどを通して、町の歴史や伝統や文化を育てていきたいという想いがあります。」

「一緒に自分たちの文化を創っていく。この取り組みを続けることで住む人の町への愛着は深まっていくはずです。」



こんな工夫もしています! 町独自のホームページで魅力を発信

ワークショップや各種イベントの様子、館の四季折々の様子を紹介し、魅力あふれる町の情報を発信しています。閲覧も多く、町民の情報共有に役立つだけでなく、ホームページを見て、館地区に惹かれ引越してこられた方もいるようです。

<http://www.yakata-cc.odense.jp/index.php>

事例のまとめ

- 地域住民主体のワークショップを開催し、大学や地域の学校と連携して若い力を活用しながら地域課題の共有を図っています。

町のシンボルを 交流の場所に。

「将監沼の自然とふれあいを育む会」

～将監地区～ 事例15

昔楽しんだ桜祭りを復活 町内挙げて将監沼の風景を取り戻す

各町内会が連携して
公園の整備を。

「将監町内会自治会連絡協議会（以降、連協）が結成30周年の記念行事の一貫として桜まつりを開催しました。延べ5,000人の方が参加し大盛況。『みんなこういった行事を待っていたんだ』『また何かやりたいね』という声があがり、桜まつりを毎年開催できるように公園をきれいに整備をしようという話になったんです」と語る連協副会長でもあり、「将監沼の自然とふれあいを育む会（以降、育む会）」事務局長でもある高橋さん。

もともと一つの町内会が里山を整備する活動をしていた団体と一緒に周辺を整備していましたが、地域のコミュニケーションを深めたいという想いから、みんなで一緒にやっつけてこうということで連協を母体とした育む会が立ち上がりました。

荒れ放題だった沼が、
新しい地域の名所として復活。

「私たちもそこに沼があることを忘れていたんです。道路から沼が見えず、若い方

たちは沼があることを知らないくらい荒れた状態でした。」

地域の活性化と公園再生のため、育む会会員を町内の回覧で募集。多くの方が集まりましたが、公園は8.4hほどの広さで、整備作業も大変。下刈りを中心に、除草、清掃などを毎月行っていますが、それでも足りないので、育む会の有志の方が土日などに活動をしています。間伐は当初、里山を整備する活動をしている団体の協力で行っていましたが、地域に経験者がいたことや作業を習得された方が出てきたことにより、現在は育む会でも行えるようになっていきます。

「以前は道路から沼が見えませんでした。3年かかってやっと見える状態になりました。昔見ていた沼が現れた時は感動しましたね。」最近将監に住み始めた方は「ここに沼があったんですね」と驚いています。また、昔の将監沼を知っている方も「子どもの頃遊んだんだよね」と喜んでいきます。



地域の宝を伝えながら この活動を 若い世代につないでいく

小中学校の総合学習に
利用できる場として整備。

「育む会では子育て支援を事業の柱の一つとし、子どもたちとの関わりを大切にしていきたいと思っています。将監沼に巣箱を設置したり、子どもたちの総合学習などでも利用してもらったりしています。」巣箱の数も増え、小鳥が入っているのを見かけるようになりました。以前、小学校では将監沼を危険区域としていましたが、今では子どもたちが将監沼に関心を持つようになって、総合学習の教材にする学校も出てきています。

また育む会では、親子で一緒にツリークライミングなどの遊びを行える「将監プレイパーク」も実施しています。

「桜の季節には、小学生たちが先生と一緒に散策している姿が見られ、感慨もひとしお。児童館や老人クラブの方たちもここで活動することが増えています。」

育む会の方々の苦勞が実り、多くの世代から愛される場所になっているようです。

若い世代とともに、
町の宝を守っていく。

現在、育む会は会員、賛助会員合わせて約1,200人。また、防犯協会・PTA・交通安全協会・商店・市民センターなど地域の各種団体も参加して、地域が一体となって取り組みを進めています。さらに、将監だけでなく、他の地域からも応援があります。



「これからはもっともっと若い世代に活動をつなげていきたい。それが課題ですね。」若い世代を巻き込む取り組みとして、若い方が多い地区の町内の会長さんに、育む会の副会長になってもらったり、プレイパークに「おやじの会」の方を誘ってもらったり小学校にお願いしたりしています。

「ここまで活動が続いているのは、沼が将監の宝・泉の宝で、子どもたちにその宝を残していきたいという想いからです。沼を通じて将監の活性化ということを若い人たちに広めていきたい。こういった育む会の取り組みをしっかりと伝えていくことが大切だと思っています。」

こんな工夫もしています!

間伐材を使って いろいろな取り組みを

毎年11月から3月にかけて間伐を行っています。その間伐材をいろいろ活用しています。公園の階段やベンチに利用したり、しいたけのほだ木として小学校に届ける取り組みも行っています。

事例のまとめ

- 将監沼という地域の宝を地域が一体となって整備し、子育て支援を中心に多くの世代から愛される交流の場所として活用しています。

必見! 地域活動 ヒント集

掲載した15事例の取材の中から出てきた「これは!」という地域活動のヒントを集めてみました。ぜひ、これからの地域活動に活かしてください。

テーマ① 活動の輪を広げるには?

町内会・学校・PTAが連携し地域活動を行っている。

栗生地区

市民センターを中心に、地域団体間の交流が図られている。

吉成地区

町内会がNPOやNPOと連携した団体と一緒に地域活動をしている。

花壇大手町町内会

地域の中학생と一緒に防災の取り組みを行っている。

泉ビレジ館地区・生出地区

地域団体の活動に町内会が協力することで、地域の子どもの安全安心が守られている。

南小泉CSN

周辺町内会が一体となって、ごみの不法投棄という課題に取り組んでいる。

六郷・七郷地区

テーマ② 活動を効果的に進めていくための組織運営上の工夫は?

地域課題解決の実行部隊として青年部を結成している。

八木山南地区

地域の各種団体が集まり、まちづくり協議会を設立し活動している。

八幡社の館運営委員会

全世帯の約1割の役員を置くことで、自主性と責任感のある体制を構築している。

福住町町内会

ランドデザイン作成委員会を結成し、5つの分科会のもとで活動を行っている。

花壇大手町町内会

事務の定型化や行事の実施を通じて災害時のシミュレーションを行うなど、効率的な活動で負担を軽減している。

ライオンズタワー仙台広瀬自治会

集会所に管理人が常駐し、施設の管理だけでなく、広報物の仕分けなどの事務を行っている。

八木山南地区

テーマ③ 地域の課題を把握・共有するためには?

住民を対象としたアンケートを実施し、地域が求めているものを把握している。

八木山南地区

様々なテーマのワークショップ(話し合い)を毎年開催し、課題の共有を図っている。

泉ビレジ館地区

テーマ④ より多くの方に活動に参加してもらうには?

市民センターのボランティア講座の受講者が地域団体と交流し活動している。

吉成地区

イベントを通じて、地域の交流が生まれ、様々な活動への参加につながっている。

生出地区

地域で活動している若い方に声をかけることで、同世代の若い方が活動に参加している。

八木山南地区

イベントに子どもを呼ぶ工夫をすることで、大人の参加にもつながっている。

福住町町内会

小学校を通じ「おやじの会」の方に声をかけている。

将監地区

「当日ちょっとだけ手伝って」というような声かけで参加の敷居を低くする。

ライオンズタワー仙台広瀬自治会

テーマ⑤ 活動を無理なく始め、継続していくためには?

何かの「ついで」に行う「おついでパトロール」を実施し、負担なく活動に取り組んでいる。

南小泉CSN

花壇のレイアウトの変更やベンチ、ガーデンテーブル、ふじ棚の設置など、毎年創意工夫を凝らすことで、活動のマンネリ化を防止している。

土手内若葉町内会

花壇園芸委員の方に町内会長名で委嘱状や感謝状を出すことで、地域社会のために貢献しているという実感が得られ、活動の意欲も高まっている。

土手内若葉町内会

活動にちょっとした遊び心を加えることで、活動の充実感が得られ、活動継続のモチベーションにもなっている。

南小泉CSN

日頃の挨拶という気軽な活動から防犯活動を始めている。

ライオンズタワー仙台広瀬自治会

テーマ6 地域の資源をどのように活かしていくか？

地域の人材を活用し、パソコン教室や介護教室を開催している。

燕沢コミュニティ・センター

地域の歴史的な資源を地域主体で管理運営し、文化活動の拠点としている。

八幡社の館運営委員会

自然の資源を地域のふれあいの場として活用している。

将監地区

テーマ7 地域の情報を地域で共有するには？

広報紙を作成・配布することで地域の情報を発信している。

広報なかだ編集委員会

町内会や社協の活動状況を随時広報している。

八木山南地区

地域独自のホームページを通じ、魅力あふれる町の情報を発信している。

泉ビレッジ館地区

今回掲載いたしましたのは、市内で活動されている事例の一部です。
本事例集を皆様の活動に役立てていただきたいと思います。
地域での活動で何かお困りのことがありましたら、お気軽にご相談ください。

問い合わせ先

青葉区役所まちづくり推進課 TEL 022-225-7211 (代表)
宮城総合支所まちづくり推進課 TEL 022-392-2111 (代表)
宮城野区役所まちづくり推進課 TEL 022-291-2111 (代表)
若林区役所まちづくり推進課 TEL 022-282-1111 (代表)
太白区役所まちづくり推進課 TEL 022-247-1111 (代表)
秋保総合支所総務課 TEL 022-399-2111 (代表)
泉区役所まちづくり推進課 TEL 022-372-3111 (代表)
企画市民局地域活動推進課 TEL 022-214-6129 (直通)

地域活動事例集 2009

平成21年10月発行

【発行】

仙台市企画市民局地域政策部
地域活動推進課企画係
仙台市青葉区国分町3丁目7番1号
TEL 022-214-6129

【編集・印刷】

株式会社 ソノベ

この冊子や地域活動に役立つ情報が企画市民局地域活動推進課のホームページでご覧いただけます。

☎ ホームページアドレス <http://www.city.sendai.jp/Category/Information/05.html>